◆資源・環境対策事業

海洋保護区を主とする沿岸資源管理（その３）－里海の課題－

八重山農林水産振興センター　鹿熊信一郎

１．目的

最近、全国で里海創生活動が盛んになっている。水産庁が平成 21 年度から開始した環境・生態系保全対策も、漁業者が主体となる藻場・干潟・サンゴ礁などの保全活動を支援する制度で、里海と深く関係している。

しかし、里海の定義は地域・人により様々で、何をさして里海と呼ぶのか、里海づくりにはどのような活動が必要なのか、等の共通理解は得られていない。このため、昨年度に引き続き、里海に関する各種会議に参加して情報を収集するとともに、特に八重山の里海創生活動を紹介し、各地の里海と比較することで効果的な里海づくりをめざした。

２．材料及び方法

1）4 月に、東アジア海洋会議 2009 での里海ワークショップの報告会に参加した。

2）10 月に、日本が議長国となり名古屋で開催された CBD-COP10（第 10 回生物多様性条約締約国会議）に参加した。

3）10 月に、白保で「世界海垣サミット in 白保－里海（SATOUMI）づくりを目指して」が開かれ、筆者もコーディネーターとして参加した。

4）水産関係の雑誌などに、八重山の里海を紹介する記事を書いた。

３．結果及び考察

1）アジアの里海の情報を収集するとともに、日本各地で里海に関する活動を行っている人とネットワークを作ることができた。特に、里海の調査・広報を積極的に行っている国連大学と連携をとることができるようになった。

2）CBD-COP10 では、少なくとも 4 つの里海に関するサイドイベントがもたれ，筆者も里海の概念や日本の海洋保護区について発表した。里海に関する日本・海外の動向に関し多くの情報を得ることができた。

3）世界海垣サミットでは、世界 7 カ国，日本の 4 県から海垣（魚垣）の関係者が集まり，3 日間にわたり熱心な議論が行われた。筆者は海垣と里海の関係について講演した。

干潟や浅いサンゴ礁海域に石を積み上げて垣を造り，干潮時になかに残った魚を漁獲する古い漁法があり、この漁具が海垣あるいは魚垣や石干見と呼ばれる。新しい漁具におされ使われなくなっていたが，最近，観光利用や環境教育の目的で復元される事例が増え、白保でも 1 つ復元された。

「人手を加えることで海の生物多様性は高くなるか？」が里海の課題の一つだが，海垣はその例と考えられている。積んだ石の隙間で貝や魚が増えるためである。

4）全漁連発行の「漁協」136、全国漁港漁場協会発行の「漁港」52:3-4、生物多様性条約事務局発行の「技術シリーズ」（和英）、日本サンゴ礁学会編集の「サンゴ礁学」、沖縄大学地域研究所発行の「地域研究」8 に、八重山の里海を紹介する記事を書いた。

４．今後の課題

1）大規模な沿岸開発工事ではなく、当面は小規模な里海づくりをめざす必要がある。

2）里海の制度的側面を整理する。

3）人手をかけて海の生物多様性を高める事例をさらに探す。